

あのロボットを作った人に会いたい!

第13回 エンタテインメントロボのニューヒーロー!? 通天閣ロボ

こんにちは、千葉工業大学未来ロボット技術研究センター (fuRo) 研究員の瀬戸文美 (せと・ふみ) です。今回会いに行ったロボットは、3月に発表されて以来、関西のみならず東京タワーや秋葉原をも練り歩き、さらには大阪市長にみずからおねだりして、上海万博にまで短い脚を伸ばそうとしている、大阪を代表する名所じゃなかった名ロボットの『通天閣ロボ』。今号の表紙撮影に便乗して、製作を担当されたロボットフォース代表の岩気裕司氏にお話を伺ってまいりました。

瀬戸 文美

(千葉工業大学・未来ロボット技術研究センター (fuRo))

170cmの巨体が動く!
しゃべる! 笑わせる!



通天閣ロボ。普段は通天閣の2階ステージにてデモンストレーションを毎日30分おきに行っている。



撮影中の一コマ。コスプレの女の子を両脇に、ご満悦の様子で通天閣ロボ。

久しぶりの東海道新幹線に乗り、はるばる向かったのは大阪、日本橋。地下鉄の駅を出ると今にも雨が降り出しそうなあいにくの空模様でしたが、そんな中でもシリコンハウス共立のリニューアルオープンイベ

ントをこなしてきたという通天閣ロボ。そんな通天閣ロボと初めての対面を果たしたのは、表紙撮影が行われていたホビESHOP『ジャングル』の2階。ファーストインプレッションはとにかく「大きい、ごつい」! 170cmと、私からは見上げる高さの身長に、重量感と安定感あふれる下半身、そしてその巨体が大阪弁でユーモラスにしゃべりながら、サクサクと動く! 通天閣観光株式会社の代表取締役が突然「通天閣をロボットにしたらオモロイちゃうんか?」とひらめいて、製作することになったというこのロボット。最初に計画を聞いたとき、びっくりしませんでした?

「私は違和感なかったですよ。というのも、(代表取締役)社長くらい年齢というのは、子どもの頃にアトムを観たり鉄人を観たり、それ以上に大阪万博のインパクトが強いのと思うんです。まあその頃の人っていうのは、お金と暇ができたらロボット作る要素を持っているんです。もうそれは間違いないです。それで時々ハマる人がいるんです。やっぱりそれは70年代くらいにDNAに何か打ち込まれているんですよね。だから全然違和感はなかった。ああこの人も発病したなっていうだけ(笑)。むしろ、同志だっていう感じ」

確かにロボットにロケットと、「科学の力」というものの最盛期に幼少の頃を過ごしたら、何かのきっかけで「作りたい!」と思うのは分かるのですが…。いやしかし、作りたいと思う気持ちだけではこんな巨体を組み上げられないのがロボットの難しさ。しかもこの通天閣ロボ、元のデザインがCGで決まっていたため、そのイメージに合わせてロボットを作らなければならなかったのです。それってゼロから設計す

るよりもずっと大変だったのではないのでしょうか。

「まあ、脚が短いので、『これ歩くのかなあ』っていうのはかなり心配だった。でももともと私、脚が2本あるものは何でも歩くと思っているんで、剛性さえあればどーにかなるよ、と。だから『歩くの?』とか言われて、『大丈夫』っていうと逆にみんなが『そんなはずはない』と思って、心配したっていう。でも『ほれ見てみい』って、大した苦労もなく(笑)、そういう意味で通天閣ならではの難しさっていうのは特になかった」

岩気さんはそうおっしゃいますが、とはいえ納期3か月!という修羅場をくぐってきた通天閣ロボ。そのメカや運用には、それを乗り越えるための努力や秘密がひっそりと、かつぎゅちりと詰まっているようです。

納期3か月と連続運用を乗り切るメカとは?

この通天閣ロボット、納期3か月の間に必ず動く形にして仕上げなければならなかったために、新しい技術は一切使わず、失敗しても大丈夫なように変更の利く設計となっています。例えばアルミ板をL字に曲げたものを2枚重ねて使われてい



表紙撮影の後、段ボールに入って通天閣まで移動する通天閣ロボ。ここからは自分で歩いてエレベータ手前まで行き、台車で上階へ移動。